



千代の春旭の舞鶴

壹の巻



千代の春旭の舞鶴脚本上の巻

二代 近松門左衛門

朝比奈三郎義秀

大藤内娘乙女

姓 権兵衛

必 よと桐

大郎兵衛

大藤内妻 柳

亭主

彌 宜 大藤内

海野次郎

實ハ備前平四郎國俊

海野太郎

家 來 大 勢



本舞臺後ろ黒幕上の方鳥居を半分見せ玉垣梅の立木あり下の方葦張茶店あり總て
鶴ヶ岡八幡宮境内の体なり幕の内より權兵衛、太郎兵衛の兩人中央の床几に腰をか
け茶食を飲み居る傍に茶店亭主茶盆を持ち立つ此見えよるしく神樂囃子にて幕開く

權「なんと太郎兵衛鎌倉様の御代參かあるとて掃除萬端行届たものではないか

太「チ、そふともくシマガ權兵衛さまさんはアノ嶋立澤の庵室に居る氣の短か

い若い侍どんをまつて居るか

權「ム、まつて居るとも

太「一体あの衆はアリヤなんといふ人じや、どへらい力でないの

權「夫の其苦サわの人は朝比奈三郎といふて歴々の種じやげなシマガ生れつゝ

ての我儘物そこで親御ももてあまし勘當されて居らる、げな

太「なる程さもあらんさもそうす ト團十郎の口色つかひ身振とる

茶亭「イヨ成田屋ア―

權「コレく太郎兵衛さんの事ぢやあはらしし トいふ内花道の向ふより

「下に居ろく

權「ソリヤこそ御代參の御通りじやサアく行ふ

太「チット承知

二人「サア行ませう

ト連立て下手へ道入る

茶「左様ならかしづのにお歸りなされませドリヤ一片付して置ふか トわたり

片付け下の方へ道入る花道より海野太郎弟次郎家來二人と連れ出て來り本舞臺

へ直り家來に向ひ

太郎「其方共は休息致せ

大勢「ハ、ア ト下の方へ道入る次郎を招き

太郎「只今途中にて會我の母が連たるは娘の磯貝彼の容儀勝れし女ゆゑ某が婦妻
にせんと再三懇望なせしといへと親子どもに不得心その儘に捨置ては此太郎

か不外聞

二郎 「そうともく兄者人の不外聞はこの次郎にもやつぱり不外聞、見るかげも

か死女原に無益の詞藪さんより今日は幸ひ彼等も参詣

太郎 「汝の松原に待合せ有無といはせずナア

二郎 「チット合点氣遣ひめさるな畑の大根ぬくより安し ト太郎の聞て

顔容と崩し悦ぶ思ひ入りわりて

太郎 「さしづめ今宵の待女郎 トうつゝになる見えわり

二郎 「みればしたり兄者人ソレ涎が ト扇子と開きて受る

太郎 「なにと馬鹿な トキツトあり

「必ぬかるちドリヤ御代参仕らふか ト太郎は上の方へ次郎の下の方

へ這入る

ウツ 「千代経べき恵をよくに鶴が岡 ト花道より大藤内、同妻柳、乙

女、娼の四人出て來り花道の真中に立留り

大藤内 「七里か濱の春霞

柳 「たなびく空に百千鳥

乙女 「囀る聲も長閑にて

藤内 「テモ麗ら、かな ト本舞臺の方を眺め

柳 「ム、われなる茶店で一憩ひ緩くりと眺めやうわい

乙女 「夫かよろしふムリ升サア娘おじや

「アイく トみなく本舞臺へ行床儿へ腰をかくる茶屋の亭主茶と持

出る

茶屋 「コレハくよう御参詣なされました ト茶を出そ

藤内 「ア、構やるなく ト茶碗をとりあたりを見廻し

「花も今か盛りしやな

神 「ろの花よりも此花の盛の過ぬ其中に祝言させば日比の願望

乙女 「アレまた母様が ト恥しがる見えあり

藤内 「イヤ〜乙女そふではないで日本一の聲じやもの何にも耻かしい事はない

ドリヤ ト立上り

「先へ参詣致であらふ

神 「左様ならば跡より参詣 ト大藤内の鳥居の内へ這入る

「シタガ肝心の聲どの親御の勘當どこを尋るやふもなしコリヤまわ氣の採る事ではある トこの時よし桐は向ふをさがめ指さして

よし 「アレ〜遠ふ目に見ても隠れぬ朝比奈様じやないかいな ト神も向

ふを見

神

「ム、なるほど噂をすれば影どやら逢ふたか幸ひ是非とも今日は直さ〜に祝言の日と極るぞやコレ娘ならば云号したとても替りやそいは男の心先で彼

是いふ時は黙つて居る事のない程に遠慮せずにつたりと怪氣のかかりし
たかよし

乙女

「アイ〜承知てござんぞシタガわんま〜り〜過てり

神

「嫌はる〜と思やるかハテ今時の子にも似ぬ女は延びてもあかん坊でいある
わいのふ

よし 「ア、申奥様その様におたづかひ遊しますすもし聞入れのない時は此よし桐
がなりかはりアノこ、畜生男めエ、悔しいと罌丸へかぶりついても承知さ
すマア何よりはちつとも早ふ ト扇子を開き
チ、イ〜 ト招く

ウタ 「鳥井通りの馬場先に色付く木々も春めたて ト花道より

朝比奈三郎梅の一枝をかたげ 臙鞘の大小 絞草履とは
さ八文字に踏て出来り真中に立留り

朝

「ア、すんとよい心持たが今呼んだのハ又酒か
ト本舞臺の方となかめ

「ヤ南無三アリア大藤内の女原ア、又祝言をねたりおるコリヤ悪い處であつたわい
ト少し考る見えわりて

「逆るも比怯エ、ま、の皮たやつける

ウタ 「匂ひと移と糸遊に花かいらぎのたて姿
ト本舞臺へ行

神

「是はく義秀様御寄持に御參詣御無禮なからイヤ先こへ
ト床几の塵と拂ふ見えわりて

「然らばゆるしやつしやい
ト腰とかくる茶屋の亭主茶と持出る

「サア一つめし上りませ
ト茶を出し下の方へ這入る

神

「ほんにマアよい所てれ目にかゝりました早速なからお尋申はそもじ様の御心底此乙女と云号御前において親々か取結びしは遙以前の祝言のさたもな
くべんく捨置は娘の器量かお氣に入らぬか但し外に思惑ても有ての事かど

朝

不審の晴ぬ折に幸ひかう直にお尋申からは御遠慮も何にもあひ有様の筋お聞
せなされて下さりませ

「ハテてつへいからおかしき挨拶何とい、めどと思へは又祝言の延た事よな
ツリヤものてござるて先婚禮の祝言のとは此朝比奈が親の家臺に寝まつて居
る時の事さ今は親父に勘當受けおん出された身まやから其頓着はないといふ
ものシタガ蕎麥やうどんでものびたはそんどよくいない殊に背丈の延た大娘
をぶらくか、へてもいられまい
ト少し考へる見えわりて

神

「チ、そうだマアかうさつさやれ夫相應な所へ早く片付のか上分別兎角此朝比奈
に縁かないと思つて下されノフ合点かア、それて双方さらりく心に
か、
る山の端もあした

「アイヤ申義秀様そりやお詞とも登へませぬよい時は進せよう悪い時の變改
して外へよめらななど、さもしい所存さけるやうを我々じやと

朝

榊

「イヤサ思ひはせねどもな流浪の身しやから女房はいらないて
 「いらぬものならなせ是迄にだまつてごさつた御勘當のお身なり共一旦の契
 約の違へられまい是非夫婦にいたしまゝと義盛泡へ申たれば勝手にせいと
 おつしやつた夫に今更うち〜と近頃御比怯千萬な

乙女

「イヤこれ母様もう何にもおつしやるなわの様に嫌ひあさるゝの定めて外
 に深ふい、かゝしたお方かあつての事所詮御得心は有まいか朝比奈様ソリヤ
 わんまり胴慾しや〜とどうよくでござんせいな

榊

「チ、尤しや〜母か傍に居る程にこわかる事もなんにもない、ひたい事と
 たんといや

乙女

「お前どの約束は誰しらぬものもなく仕合しやの目出度のと人の羨む手前も
 あるよめらぬ先に嫌はれた去れたといはれての世間へとふも顔か出せぬたと
 ひ一日半日でもお前の内へ呼入てお氣に入らそは兎も角も何んの落度もあ

ト袴や袂と引き

朝

ものどむごい難面なされかたエ、うらめしい朝比奈様
 しやあぐりて泣く

「ア、是は〜見苦しい様々の事をゆつて責るのコレサ外の女の事、置てこ
 つばづかしい事だがつるに色氣といふものゝしらない男た

乙女

「アレ〜あんなに嘘ばつかり

朝

「イヤサ誓文嘘てあゝ此朝比奈生れ付て女嫌いた其証據ハチ、夫よとごさまと
 縁を切バとて一生女房は持あいな

乙女

「ム、こりや聞所しやしたか口計ては誠にならぬそんなら一生持たせぬやう
 お前の傍に夜も晝も急度張番して居そへサア連れていんで下さんせいな

朝

「ハテとふいへんのういふと去逆聞分のない女だはいの

乙女

「スリアどふ有てもならぬかへ
 「ハテ虫か嫌ふはいの

朝 榊

「ハア、そんなら娘あ、おつしやるがあなち嘘でもないかいの

「アレまたいんつしやるは其あなちか嫌といふに

り少し思案する思ひ入りわりて

ト朝比奈は迷惑が

「イヤこれお袋何かといふも立なからの沙汰ては有まいおらか今いる所はま

ぎ立澤の指口てつかい松か一本有て隠れまかいのない所た重ねて浮出と待申

榊

「ほんにそれく人立多い所も恥そはしたくない娘嗜みやあの様におつしや

るからの十か九つ御得心委細ことゆつくりと藤内どのにも咄した上必々

近々にお目にか、つて申ます

乙女

「左様あらは朝比奈様

朝

「御用かわらぬ浮出われ

ト榊、乙女、姉の上の方鳥居の内へ這入る跡に

朝比奈ははつと一息する見え有て

「エ、いまくしい親父か馬鹿な約束しておらにやつかいとかけるわいヨリ

ヤまわ何んたる ト木のかしら

「因果たなア

ト舞置廻る

千代の春旭の舞鶴一の巻終

初代近松門左衛門著作ニシテ近松家が逐次
発行スル書目ヲ左ニ掲グ

- 八百屋み七
- 主島判官盛久
- 二世の組帯
- 讀賣三巴
- 追善佛御前
- 日美丸
- 大和歌五報色紙

- 誓願寺遊行念佛
- 源氏冷泉節
- 日本武尊東鑑
- 室町千疊敷
- 傾城反魂香
- 心中二枚繪卿紙
- 今宮心中

- 博多女郎涙枕
- 紙屋治兵衛
- 出世景清
- 本領曾我
- 百日曾我
- 源三位頼政
- 蟬丸

- 十二段
- 釋迦如來誕生會
- 西明寺殿百人上薦
- 曾我五人兄弟
- 用明天皇職人鑑
- 雪女五枚羽子板
- 傾城二河白道
- 兼公法師物見車合冊
- 碁盤太平記
- 増補曾我
- 酒呑童子枕言葉
- 曾我虎が石
- 百合若大臣野守鏡
- 大原問答青葉笛
- 傾城阿波鳴門
- 大經師昔歴
- 冥途の飛脚

- 姫姥山
- 天神記
- 相摸入道千匹犬
- 弘徽殿鶉羽生家
- 瀧口歌加留多
- 横笛
- 本朝五翠殿
- 曾根崎心中
- 鎗の權三重帷子
- 傾城酒呑童子
- 日本振袖始
- 山崎
- 與次郎兵衛壽の門松
- 心中天の網島
- 宵庚申
- 信州川中島合戦
- 雙生隅田川

- 今様反魂香
- 太平記曦鎧
- 井筒業平河内通
- 平安女護島
- 國姓爺合戦
- 同後日合戦
- 關八州繫馬
- 曾我會稽山
- 右大將鎌倉實記
- 於初天神記
- 三莊太夫五人娘
- 傾城島原蛙合戦
- 佛御前扇車
- 追善重井筒



- 頼朝七騎落
- 佐々木大鑑
- 多田滿仲記
- 遠磨の本地
- 源氏冷泉節
- 天智天皇
- 松風村雨朱帶鑑
- 鎌田兵衛名所の盃
- 新本領曾我
- 今様小栗判官
- 浦島年代記
- 淀鯉出世灘登
- 十二段長生島臺
- 大掛物十幅對
- 大磯の虎稚物語

- 加古教心七葉巡
- 日本王代記
- 源五兵衛薩摩歌
- 小まん薩摩歌
- 甲賀三郎
- 曾我扇八景
- 源義經將基經
- 吉野忠信
- 堀川浪の鼓
- おかめ
- 與兵衛卯月の紅葉
- 同卯月の色上
- 丹波與作
- 關小まん待夜小室節
- おひめ衆之助
- おささ
- 治郎兵衛掛鯛心中
- 傾城掛物蒨

- 孕常盤
- 傾城吉岡染
- 新撰大職冠
- 嵯峨天皇甘露の雨
- 二人静胎内探
- 持統天皇歌軍法
- 聖德太子繪傳記
- 日連聖人記
- 本朝三國志
- 女殺油の地獄
- 復鳥羽戀塚
- 伊達染手綱
- 赤染衛門榮花物語

明治廿七年三月四日印刷
全廿七年三月十五日發行

定價金六匁

大阪府西成郡會根崎村番外拾八番邸全居

二代目

著作人 近松門左衛門

大阪府西成郡會根崎村番外拾八番地

發行者 岡野美春

大阪府西區阿波座上通貳丁目百廿四番屋敷

印刷者 近藤重助

大阪府西區京町堀通四丁目廿八番屋敷

印刷所 福田友吉

版權
興行
所有

088666-000-0

特52-597

千代の春旭の舞鶴 上の巻

近松 門左衛門(二代) / 著

M27

DBJ-0325

